

## 「アララギ」に見る戦後の歌

この夏には「今 読み直す戦後短歌Ⅰ」という研究会が、女性歌人たちの呼びかけで催されました、わたしも聴きにまいりました。呼びかけた人も、研究発表をした人も女性で、研究の対象となった戦後の歌人も女流歌人であった点に特色があり、わたしは興味ふかく思ったのでした。

そこでわたし自身にとって「戦後短歌」とはなんだったのだろうかかとあらためてふりかえてみますと、やはり、敗戦直後、昭和二十年、二十一年、二十二年あたりの雑誌「アララギ」だったのだろうと思うのであります。いわゆる復刊「アララギ」であって、戦災等による休刊（昭和二十年一月～八月）を経て、九月号が敗戦後数箇月といった時点で、きびしい郵便事情をくぐって、会員に届けられました。わたし自身のことを言えば、十七歳の旧制高校理科の学生で歌を作りはじめたばかりでした。「アララギ」の地方会員だった父が、三重県の疎開先の農家で復刊「アララギ」を手にとった時の感慨深い表情が今でも記憶に残っています。B29の空襲によって焼け野原となった名古屋市東区のわたしたちの旧宅の焼跡には、郵便物の転送先を書いた棒杭が立っていて、その指示に従って復刊

「アララギ」九月号（十六頁の雑誌）が届いたのでした。あの焦土化した日本のどこで印刷が行なわれ、それが会員名簿に従って全国に郵送されるだけの郵便制度がどうして保持されていたのか、今に思うと不思議であります。

今、昭和二十年九月号を手にとってみますと、「編輯所便」で土屋文明が「休刊中の報告」を書いていきますし、雑誌の本身も、戦争末期に書かれた原稿と、戦後書かれたものが入り混っています。とりあえず一冊にしてみましたという感じも、敗戦前後の社会状況のあらあらしさを如実に示しているのであります。次に、短歌作品をすこし引用してみたいと思います。

秋晴のひかりとなりて楽しくも実りに入らむ栗も胡桃も

斎藤茂吉

灰燼の中より吾もフェニキスとなりてし飛ばむ小さけれども

同

茂吉は当時山形県の郷里の村に疎開していましたが、このような



歌をいち早く作って東京の「アララギ」発行所へ届けたのです。むしろこれらの前向きの明るい歌の前に、一首、天皇（すめろぎ）の地位の安定を願う歌が置かれていて、米軍占領下の敗戦国日本を象徴するかのようには思われませんが、とにかく「秋晴のひかり」のもとに結実しようとする「栗」や「胡桃」をたたえているのは「元気を出そうよ」「くじけずに行こうぜ」といった意気込みがみられます。こまかいことを言えば「実りに入らむ」と「む」という助動詞を使っているところも見逃せません。「灰燼の中」から飛び出そうとする「フエニキス（不死鳥）」という比喻についてはいうまでもありません。「小さけれども」という結句の条件付けについても説明は要らないでしょう。どん底に立って、一から出直すのだという気持ちであります。茂吉の東京の家も、茂吉の疎開後に戦災をうけて焼亡しましたし、「秋晴」の歌の「栗」「胡桃」は、東京ではない、日本の農村を示しているともいえます。

「アララギ」九月号には八人の人の歌が載っているだけですが、これが十月、十一月と次第に出詠者がふえて行きます。十二月号には三十三人の人の歌が並んでいます。若い世代の戦後の歌が、ぼつぼつ出はじめています。わたしなどが、「うん、これは戦後という新しい時代のはじまりだな」と漠然と思うようになったのは、たぶん、次のような歌を読んでからでしょう。（引用歌表記は、発表時原作に従う）

世をあげし思潮の中にももり来て今こそ戦争を憎む心よ

近藤芳美

苦しみし十年は過ぎて思ふ時思想、偽るにあまり馴れ居ぬ

同

これらは決して上手な歌ではなく、むしろ不器用に思うところを歌にしたといったたぐいの作品でしょう。しかしそのぶきつちよにごつごつ言うところも、戦後の歌の特徴だったのでしょう。

以下、数人の人の歌をあげて、「アララギ」十二月号に見る、敗戦後数箇月というあたりの若い世代の表情をさぐってみましょう。

戦争すぎてはや二月かベネズエラに起る革命も思ひしむもの

杉浦明平

くまもなく国のみじめの露れてつひに清らなる生命恋しも

高安国世

新しく起る思想をたのみまつ夜々がありて幾らか楽し

斎藤喜博

女性の歌もあげて置きます。混乱の中、人と人が会うことも情報をうることも困難だった状況をあらわしています。

かくのごとあひて喜ぶ子等あれば老い衰へしいのち惜まむ

高安やす子

たらちねの母みまかるとこのふみは一月過ぎて今日つきにけり

鹿見鳥やすほ